



芝浦工業大学

教育イノベーション推進センター 教職支援室

2023.03

47号

教職課程だより

CONTENTS

- | | | | |
|-----|---|------|--|
| 1 | 学習指導要領の改訂をめぐって
教育イノベーション推進センター 野村春路 | 6 | ボランティア体験のススメ
システム理工学部 機械制御システム学科 竹崎雅人 |
| 2-4 | 教育実習の体験と学び
工学部 応用化学科 有賀はるね
工学部 機械工学科 齋藤天太
システム理工学部 生命科学科 亀田舜
システム理工学部 数理科学科 三浦環 | 7 | 第9回教職課程同窓生の集い
教職支援室／工学部 岡田佳子 |
| 5 | 教員採用試験合格への道のり
システム理工学部 生命科学科 石村千咲
システム理工学部 数理科学科 安田智絢 | 8 | 芝浦工業大学教職課程について
教職支援室長／システム理工学部 奥田宏志
教職支援室／システム理工学部 田中友佳子 |
| | | 編集後記 | |

学習指導要領の改訂をめぐって

教育イノベーション推進センター

野村 春路

今年度(2022年度)より、高等学校の学習指導要領が改訂され、年次進行で実施され始めました。まず高校1年生から新たな学習指導要領に基づき、授業が行われていますが、各教科とも「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱に従って、新学習指導要領で育成すべき資質と能力が定義されています。さて10年に一度改訂される学習指導要領ですが、今回の改訂は以前に比べても大きな変更であると言えます。そこで、今回の改訂の背景・経緯を見てみましょう。現在の高等学校学習指導要領は、平成30(2018)年7月に告示されましたが、その総則編の冒頭に以下のような「改訂の経緯」が述べられています。

「今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。(中略)こうした変化の1つとして、進化した人工知能(AI)が様々な判断を行ったり、身近な物の働きがインターネット経由で最適化されるIoTが広がったりするなど、Society5.0とも呼ばれる新たな時代の到来が、社会や生活を大きく変えていくとの予測もなされている。また、情報化やグローバル化が進展する社会においては、多様な事象が

複雑さを増し、変化の先行きを見通すことが一層難しくなってきた。」

この改訂の経緯を少し解説しますと、1990年代以降、日本は「失われた30年」の時期を経て、世界における日本のプレゼンスが大きく後退し、変わりたいくても変わらない従来型のシステムの中で、動きが取れなくなったことが背景となっています。その中で21世紀型の新たな時代の到来の中で、児童・生徒の「学び」を見直し、その時代に対応できる人間になることを目指しています。上記の総則の一部において、前面に出ているのは、「情報化」と「グローバル化」です。実は、この「情報化」は無批判にスキル修得だけを目指すことはアメリカ企業(ビッグテック)集権型の情報化となりかねませんし、「グローバル化」は世評多様性尊重や異文化理解と言ってはいますが、根底は常に「欧米化」です。今や国際経済において、さらにアメリカや中国の後塵を拝することになる日本は、この表面上「情報化」・「グローバル化」という顔を持つ「欧米化」への道を進むことしか選択肢がないように見えます。しかしこの道を生徒とともに歩んで行く教員は、教育こそが社会を変えていく原動力であると信じて、世界全体を利するための情報化、欧米一辺倒ではないグローバル化について、生徒とともに問い続ける姿勢を持ってほしいと思っています。

教育実習の体験と学び

工学部 応用化学学科

有賀 はるね

私立中学・高等学校
理科

私は3週間、母校である千葉県の私立中学・高等学校で実習を行いました。

実習の2週間前にガイダンスがあり、実習生として初めて母校を訪れました。ガイダンスでは校長先生、担当教員から心構えとして生徒の見本となるよう言動の注意があり、気が引き締まる思いで聞いたことを覚えています。その後、指導教員と3週間の授業の流れ、研究授業の日付等の調整を行いました。担当教科は中学1年生の理科1分野で、研究授業はアンモニア噴水実験を行うことになりました。私が化学の興味を持つきっかけとなった実験であり、その授業を実習生として行うことに、嬉しい気持ちと失敗できないという緊張感がありました。

実習初日は担当クラスへの挨拶、指導教員の授業見学を行いました。翌日から実験の授業実習があり、予備実験、準備を行い、うまくできるか不安の中で初日を終えました。2日目は初めての授業実習を終え、指導教員と見学に来てくださった先生から合格点をいただき、とても安心したのと同時に自信ができました。しかし、安全管理の徹底、クラス全体の把握、環境づくりなどの課題点も見つけ、より良い授業をするためのきっかけとなりました。3日目以降は授業見学を行いました。課題点を見つけれられていた分、先生方がクラスの雰囲気によって集中させる方法をどのように使い分け、理科の実験で何を意識して準備し



ているのか、研究授業に向けて学習出来ました。

2週目からは授業を行いました。3時間連続で授業を行った際は途中喉が枯れてしまい、技術面だけでなく体力等も必要だということを感じました。また、2週目は体育大会があり、イベント時の教員の動きや、安全管理を学ぶことができました。3週目では模擬授業に向け、実験操作手順の動画の撮影、予備実験・実験器具の作製を行い、準備の大変さを感じました。実験器具の作製では、生徒が手を切らないようにガラス器具の断面をバーナーで熱しておくなど安全管理の重要性を学びました。模擬授業を終え、改善点、反省点は多く見つけましたが、指導教員をはじめ多くの先生方に良い評価をいただけたことと、生徒から実験が楽しかったという感想をもらい、記憶に残る授業ができたと感じています。

実習を終え、改めて先生方の偉大さを感じ、勉強することができました。教師として、また人としても未熟ですが、生徒にとっては人生の先輩であり、良い見本として成長できるように実習の経験を活かしていきたいです。

工学部 機械工学科

齋藤 天太

公立高等学校
工業

私は母校である工業高校で、2週間教育実習をさせていただきました。担当クラスは機械科3年を持ち、授業は「機械設計」を担当しました。実習の流れとして、1週目は先生方から教員の仕事や教員としての心得などの貴重なお話を伺い、教員についての理解を深めました。また、自分の担当する科目はもちろんの

こと、先生方の授業を多く参観させていただきました。1週目の後半から実際に教壇に立ち授業を行っていきました。2週目は主に授業を行い、最後の研究授業へ向け準備を進めるという形で、最後に研究授業を行い私は実習を終えました。

担当クラスでは朝と帰りのホームルームを

任されましたが、伝達事項を伝えるだけで終わらないように、プラス一言を付け加えるように工夫しました。高校では担当教科以外でクラスの生徒と関わる時間が基本的にホームルームしかないで、ちょっとした時間でできるだけ生徒とコミュニケーションを取ることを意識しました。先生方の授業を参観していると、生徒との信頼関係は授業での生徒の反応に繋がることに気づきました。正直なところ2週間でクラス全員と信頼関係を築くことは厳しかったですが、生徒は私の授業にとっても協力してくれて、とてもありがたかったです。

実際に授業をして一番強く思ったことは、時間配分の難しさです。事前に次の授業はここまでやると決めても、実際に授業をすると説明や板書に思った以上の時間がかかりました。また、生徒からの反応でイレギュラーなものが来たりすると、その対応でまた時間がかかってしまい、思うように進みませんでした。研究授業では少し範囲を狭くして、準備段階では授業時間より5分ほど余裕を持って終わるように計画しました。当日は時間内で予

定の範囲まで問題なく行うことができました。しかし、細かいところでは反省点が多々ありました。参観していただいた先生方からアドバイス等も受けましたが、お褒めの言葉もいただき、とても良い経験になりました。

教育実習では教員の仕事はもちろんのこと、生徒としては気付けないことなど、良いところと悪いところを知ることができました。生徒ファーストで授業を行う大切さなど、実際に現場を経験してみて、大学の講義で身につけたこととのギャップなどもありました。私自身、身をもってこれらの経験ができたことで、人として成長できたと思います。



システム理工学部 生命科学科

亀田 舜

公立中学校
理科

私が教育実習をさせていただいたのは、母校の公立中学校で、生徒数は全校合わせても300人に満たない小さな学校でした。それでも強く感じたのは、本当に色々な生徒がいる、ということです。自分が教員の立場から生徒と関わってみると、こんなにもそれぞれ違う色があって、その結果、学級・学年・学校にも違った色が現れるのだということを肌で感じることができました。特に実習の前半は、周りの先生方はそういった違いをどのように捉え、関わり方をどう考えているのか理解すること、そして生徒をよく見ることに努めました。

授業は2年生(3学級)の理科、気象の分野を担当しました。実習校は、私が生徒だった頃からグループワークに力を入れており、4人組をつくって授業を進めていくのが基本の形として定着していました。あくまで生徒主体の授業づくりというのが、大学の講義に慣れてしまった私にとっては、最初はとても難し

かったです。授業中の活動も、班や学級によって進度に差が出てくるので、生徒の反応を見ながらどう導いていくか、ということに関して多くのアドバイスをいただきました。その中で特に効果的だと感じたのは、「生徒のつぶやきを拾う」ということです。実験をした後、なぜこのような現象が起きたのかを考察する時間に、特に意識しました。生徒が班で話し合っているときや、考えをプリントに書いて



生徒たちから嬉しいサプライズ
実習の最終日に、担当した2年生のみなさんから花束と寄せ書きを贈っていただいたときの様子です。



いるときなどに聞こえてくる、「なんだろう」、「なるほど」、「こういうことじゃないかな」といった声には、生徒の疑問点や気づきが詰め込まれています。それらを拾って、「この班はこういうことを話し合っていたけど、どう思う?」、「今すごく良いワードが出てきたから、これについて考えてみよう」という風に全体に共有していくと、生徒主体でありながらも、着地点を見失わずに授業を展開していけると学ぶことができました。

生活面では、未だ感染症の影響もあり、給食中はパーテーションを使用し黙食しなければ

ならないなど、最初は生徒とコミュニケーションを取ることが難しかったです。それでも実習中に体育祭があったので、その練習などで少しずつ生徒と打ち解けていくことができました。生徒と関わる時間を大切にしたら分、授業でも、それ以外でも、良い関係が築けているかどうかを、生徒は鑑として返してくれるものだと思われました。

実習中の3週間は、本当にあっという間で、学校生活という尊い時間を過ごしている生徒と共に学び合える機会は、とても貴重です。ぜひ楽しんでください。

システム理工学部 数理科学科

三浦 環

私立中学・高等学校
数学

私は母校である私立中高一貫校で数学の教育実習を行いました。配属学年は中学3年生で教科担当も中学3年生でした。

第1週目の授業観察ではできる限り様々な教科の授業を見学しました。特に印象深かったのは社会科の授業で、ICTを用いて授業を行っていました。例えば、授業開始後にはGoogle Formで小テストをおこなったり、授業で使用する資料をPowerPointで配布するなど、教科の違いはあるものの、様々な授業形態があることを学びました。第2週目以降は実際に教壇実習を行い、自身の教科指導力を高めるために精進しました。進度が遅くなったり、前を向いてなかなか話すことができなかったりなど、課題や反省点はたくさんありましたが、堂々としているというお褒めの言葉を頂くこともできました。これまでの小、中学校におけるボランティア活動の経験のありがたみを、改めて実感することができました。

私が教育実習を行うにあたって、特に心掛けたことが2つあります。1つ目は、生徒とコミュニケーションをとる際にフレンドリーになりすぎないことです。教育実習では生徒とコミュニケーションをとろうと意気込んでいました。しかし、生徒から見たら私はあくまで教師であるため、友達のようにならないよう、話す内容などに気を付け

ながら接しました。2つ目は、教科書で当たり前のように説明されている内容も、なぜ成り立つのか、なぜその解法を使うのか説明ができるように準備することです。生徒に授業で解説する際に、「教科書に沿った授業展開をしなくてはならないが、教科書と同じ解説をするだけでは授業の意味がない」と考え、なぜ例題ではこの定理を使うのか、などの発問を増やし、パターン暗記をしてしまう生徒を減らす努力をしました。

教師の仕事は教科指導がメインだと思っていましたが、実際は生徒指導などの教科指導以外の仕事が増大にあることを、身をもって学ぶことができました。また、この教育実習を通して、教職へのあこがれが一層強くなりました。

最後になりましたが、教育実習を行うにあたり受け入れてくださった校長先生、お忙しい中ずっと指導して下さった指導教員の先生にこの場をお借りして御礼申し上げます。



立方体の最短距離に関する動的教材

「三平方の定理」の例題解説にあたってGeoGebraで作成した動的教材です。展開図上の赤線は直線となっており、点A、Bを結ぶ最短距離が赤線になることを、実際に黒線上の点Pを動かして確認しました。

教員採用試験合格への道のり

システム理工学部 生命科学科

石村 千咲

私は2022年に千葉県の中高共通理科の教員採用試験を一般受験し、合格することができました。私が合格までに取り組んだことをお話しします。

まず1次試験は、教職教養・専門教養の筆記試験と集団討論でした。教職教養と専門教養は3年生の夏休みから勉強し始め、過去の出題傾向を把握しながら参考書と問題集を並行して進めていました。特に専門の理科は物理・化学・生物・地学の4分野あります。私は高校で物理と化学を履修していましたが、生物と地学は履修していませんでした。そのため、物理と化学は過去の出題傾向から出そうな部分を中心に対策し、生物と地学は基礎から取り組んで春休み中に一通り学習し終わりました。そして、集団討論の対策では、大学や予備校の対策講座を多く活用していました。

1次試験対策で大切なことは、早めに基礎を固めることだと思います。実際の試験は基本問題が多く、どれだけ基礎が身についているかがカギになります。私自身、4月から卒業研究が始まり、平日は実験があるため休日に多くの勉強時間を費やしました。また5月は教育実習があつてなかなか勉強をする時間が取れず、気づけば一次試験本番まで残り一か月となっていました。そのため、春休みまでに基礎を固め、過去問対策に時間を費やせるかどうか合格への近道になってくると思います。

次に2次試験は、個人面接と模擬授業でした。個人面接で大切なことは、自分の軸をしっかり持つことだと思います。ぶれない自分の軸をしっかり持つことで様々な質問に対しても一貫性をもって答えることができます。また、面接は何度も練習することが必要です。私も予備校の対策講座を活用して何度も練習しました。模擬授業では、教科書を3学年分把握し、主体的で対話的な授業を組み立てることに努めました。授業のめあてを明確にし、机間巡視をする場面や生徒に考えさせる発問を多く取り入れた授業をすることが大切です。

最後に、アドバイスとして多くのボランティア活動を経験しておくことをお勧めします。私は現在、週に一回現場の中学校に行き、教職の仕事を間近で学んでいます。ここでは教育実習とはまた異なった経験をすることができ、新しい発見や学びを得る良い機会になりました。

そしてこの度、ご指導いただいた先生方に御礼申し上げます。これからも日々学び続けながら教員として生徒ともに成長していきたいと思っています。

システム理工学部 数理科学科

安田 智絢

私は今年、東京都の中高共通数学の教員採用試験を一般受験し、合格することができました。ここでは、私が教員採用試験に合格するまでに取り組んだことをお話ししたいと思います。

教員になると決心してから、最初に始めたことは、ボランティア活動です。3年生の時からは、適応指導教室でのボランティア活動と中学校での学習支援ボランティアを行いました。その後4年生になり、教育実習が10月に行われることを知ったため、学習支援教室のボランティア活動を始めました。どのボランティア先でも、多くの学びがあり、機会を得たときに積極的に行動して良かったと今ではとても思います。

次に1次試験についてです。1次試験では、教職教養、専門教養、小論文の試験がありました。教職教養では、まず単語帳で基本的な用語を暗記したあとに、問題集と過去問を何週も解き、知らなかったことをノートにまとめ、知識を少しずつ増やすようにしました。また、東京都では、独自に行っている制度や方針に関する出題もあったため、情報収集をするようにしていました。専門教養では、過去問と参考書を並行して進めました。難易度が高いというよりは、時間が足りなくなってしまう傾向があったため、公式をノートにまとめて暗記したり、わからない問題があった時には友人に教えてもらったりしていました。小論文では、キャリアサポート課を利用し、小論文を書いては書き直すことを何度も繰り返しました。小論文を書くことに慣れるには、時間がかかってしまうため、この時期から始めてよかったと思います。

次に、2次試験についてです。2次試験では、集団面接(集団討論)と個人面接がありました。集団面接は1つの課題が与えられ、それについて話し合うというものです。周りの人の意見を否定するのではなく、尊重しながら自分の意見も発言していくことを大切にし、本番に向けて練習しました。個人面接では、面接票、単元指導計画、場面指導の3つの内容でした。それぞれに関する質問を予想し、回答を考えるようにしました。長々と答えるのではなく、質問に簡潔に答え、面接官と会話をするように心がけました。

教職課程の先生方やキャリアサポート課の職員の皆さんをはじめ、多くの皆さんに支えられて合格することができました。教員になってからも常に学び続けられるように努力していきたいと思っています。

学習支援教室の ボランティアを 通して

システム理工学部 機械制御システム学科

竹崎 雅人



私は2022年にさいたま市の学習支援事業団体のボランティアに登録し、週2～4日、中高生に勉強を教える活動をしました。私が勉強を教えたことは事実なのですが、それ以上に、生徒たちから様々なことを学び経験したという記憶の方が圧倒的に大きいといえます。

私が登録した学習支援教室は、学習支援とともに居場所づくりも事業目的に含まれていました。来室する生徒たちは、家庭や家計、学校生活、学習に「難しさ」を抱えていることがあり、ボランティアには学習を教えるだけではなく、会話やボードゲームなどを通じた勉強以外でのコミュニケーションが求められました。その中で、遠くから見える「難しさ」と、実際に生徒たちと関わり向き合う「難しさ」の形は全く異なるということに気づかされました。家族、経済力、学校、成績、人それぞれの境遇があり、それに対する様々な捉え方があります。その「難しさ」は何によって生まれているのか。社会的な要因はあるのか。生徒たちから見えるそれらは一体どのような形をしているのか。生徒たちだけでなく、教室長や他のボランティアの話を聞けば聞くほど知らなかったことばかりで、大切なのは、1つの「難しさ」を多面的かつ多角的に捉えるということでした。

時々、当事者経験のない人間が貧困や家庭関係に関わろうとすることを「当事者でなければ分からないのに」と敬遠する人がいます。確かに分からないかもしれない。しかし、分からないままでいいのでしょうか。遠くから同情を寄せるだけでは核心を捉えることはできず、当事者でないからこそ、知らないからこそ歩み寄り、当事者から見える「難しさ」と向き合う必要があるのではないのでしょうか。

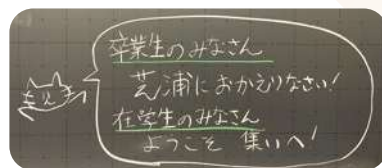
学習支援教室での勉強以外のコミュニケーションは、まさに生徒たち本人の「難しさ」と向き合うための時間であり、家庭や学校、行政、法律など様々な社会の現状を考え、自分が将来何に取り組みたいかの選択の幅を広げることにもつながりました。勉強を教える経験は塾講師や家庭教師など様々ですが、私は学習支援教室のボランティアという選択肢を強く勧めたいです。

第9回

教職課程 同窓生の集い

を開催しました

教職支援室／工学部 岡田佳子



2022年12月10(土)に第9回「教職課程同窓生の集い」を大宮キャンパスとオンラインのハイブリッド形式で行いました。第9回となる今回は、卒業生2名にシンポジストとして登壇していただきました。今回初の試みとして、芝浦工業大学で教員免許を取得した後、企業に就職して活躍している卒業生にも登壇していただきました。

はじめに、元教職課程教員の穂坂明德先生よりご挨拶いただき、同窓生の集いの目的は、1.社会に出た先生(卒業生)に対するアフターケアと交流の場の提供、2.今後の教員としての目標を考えるヒントとなる学びや交流の場、3.今後の学びの姿勢へのヒントとなる学びや交流の場であることをお話しいただきました。

次にシンポジストのお2人にご講演いただきました。1人目の福本隼也先生(2012年度、工学部応用化学科卒)は横浜市立中学校で理科の教員をなさっています。教員10年目の福本先生からは、教員の仕事について豊富な写真や授業資料、実体験を交えて紹介いただきました。卒業式の黒板アートや学級通信など福本先生の生徒たちへの思いが伝わり、教員としての思いを再確認した在学生も多かったのではと思います。教員のやりがいを先輩から直接聞くことができたことも在学生にとっては貴重な経験になったことでしょう。

2人目の尼崎百音さん(2019年度、システム理工学部数理科学科卒)はパナソニック コネクト株式会社でシステムエンジニアをなさっています。VUCA時代(Volatility 変動性、Uncertainty 不確実性、Complexity 複雑性、Ambiguity 曖昧性)に社会で活躍する上で、教職課程での多様性に対する理解、社会で求められていることへの理解、様々な経験が大変役立っていることをご自身の経験を交えてお話ししてくれました。教職課程の学生は全員が卒業後すぐに教員になるわけではないですが、教職課程で学ぶことの新たな意義に気づき、視野を広げる機会となったのではないかと思います。



教職課程同窓生の集いで講演される福本隼也先生(写真上)と尼崎百音さん(写真下)

ご講演終了後は、参加者同士の自由な交流の時間となりました。卒業生と在学生の交流も生まれ、参加した学生から「とてもためになりました。芝浦卒業後に教員として頑張っている先輩の話を聞くことができ、今後について考えることができました(工学部1年生)」といった感想も届いています。10回目を迎える来年度に向けて同窓生の集いをますます盛り上げていきたいと思っています。

芝浦工業大学の前身は、1927年に有元史郎により創設された東京高等工商学校です。その後、東京高等工学校、芝浦高等工学校へと校名を改称し、1944年に芝浦工業専門学校となりました。1949年に学校教育法に基づく学制改革に伴い芝浦工業大学となり、1954年から本学の教職課程が始まりました。現在、本学の教職課程では、工学部、システム理工学部、デザイン工学部において中学校教諭一種免許状(数学・理科)、高等学校教諭一種免許状(数学・理科・工業・情報)、及び大学院においては中学校専修免許状(数学・理科)、高等学校専修免許状(数学・理科・工業・情報)が取得可能となっています。

本学の建学の理念として「我等の生活の中に科学の解け込んだ現代文化の諸相を教材とし、社会の一員たる個人に社会的活動の意義を体得させる特色ある教育を行い、以って社会に貢献する」という実学志向の理念を有しています。教員養成も大学の基本理念と伝統のもとに、社会において信頼と尊敬を獲得しうる教員の育成とともに、工学専門教育を基礎に数理科学に優れた豊かな教育的実践能力の育成

を目指しています。2021年度から全学的な組織として「教職支援室」を新設し、各学部の特質を生かした教員養成の取り組みを社会的使命の一つとして、その責任を果たして行きたいと考えています。

教育職員免許状取得には、卒業するために必要な条件と教育職員免許状取得に必要な条件の両方を満たす必要があります。教育職員免許状取得の基礎要件は「学士の学位を有すること」になっていますので、自身が所属する学科における学びを大切にしてください。また、正課である専門科目や教職課程科目の学修に加え、正課外活動のなかで考え方や世代が異なる人たちとの交流をすることも、社会において信頼と尊敬を得る上で大切な姿勢や態度の学びに繋がります。現在、教員を目指す学生・院生同士が交流できるような場として勉強会等も行っています。本学の教職課程で学んだ多くの卒業生が教壇に立ち活躍していますので、一人でも多くの人が、複雑化、多様化した教育現場に貢献する教員を目指してくれることを期待します。

本学で取得可能な教育職員免許状※

学部	中学校教諭一種免許状	高等学校教諭一種免許状
工学部	数学・理科	数学・理科・工業・情報
システム理工学部	数学・理科	数学・理科・工業・情報
デザイン工学部	—	工業
大学院	中学校教諭専修免許状	高等学校教諭専修免許状
理工学研究科	数学・理科	数学・理科・工業・情報

※各学科・専攻によって、取得できる免許科目は異なります。

編集後記

2022年度の「教職課程だより」をお届けします。巻頭言では、教育イノベーション推進センターの野村春路先生に寄稿していただきました。野村先生は芝浦工業大学柏中学高等学校で長く教員を勤められ、校長として学校経営に携わったご経験から、高等学校の学習指導要領の改訂ポイントと今後の高等学校教育の在り方についてご教示いただきました。

教育実習体験記を学部生4名に書いてもらい、教員採用試験に現役合格した学部生2名には合格体験記を寄稿してもらいました。また本号では、初めて学部生1名によるボランティア体験記を掲載しています。大学在学中から教育や福祉の現場で経験を積み、教科指導力や人間性など教員としての力量を高めていくことが求められています。教職

課程履修生の皆さんには、ボランティアなどの学外活動に参加する際の参考にいただければと思います。

教職課程同窓生の集いについては、岡田佳子先生にご報告いただきました。教育職に就いたり、教職課程で学んだOB・OGの繋がりが強くなっていることを実感し、大変嬉しく思います。

第47号「教職課程だより」から、デザインを一新することになりました。カラー版にしたり、写真やイラストを添えたりするなどの工夫を加えています。また、本学教職課程の概要について、教職支援室長の奥田宏志先生に執筆していただきました。今後も「教職課程だより」を、より良い内容にしていきたいと考えています。引き続き、関係者の皆様のお力添えをいただけますと幸いです。

(教職支援室／システム理工学部 田中友佳子)